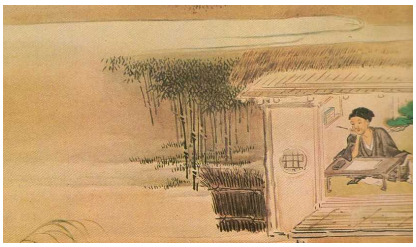
《令和五年　暗唱②》

方丈記

鴨長明

ゆく河の流れは　絶えずして、
しかも　もとの水に　あらず。
よどみに浮かぶ　うたかたは、
かつ消え、かつ結びて、久しく
とどまりたる　ためしなし。
世の中の　人と　すみかと、
また　かくのごとし。

今から800年以上前に書かれたお話です。今の言葉での説明は下にあります。



方丈記（現代語訳）

流れていく川の流れは絶えることがなく、それでいて（その水はどんどんうつりかわって）もとの同じ水ではない。（川の）よどんだところに浮かぶ水の泡は、こっちで消え（たかと思うと）そっちにできて、いつまでも同じ（泡）だということはない。世の中に生きている人と（その人の）住んでいるところ（との関係）は、ちょうど（川の流れや水の泡と）同じようなものである。